

忘れかけた頃に ～『あの日』からの千の夜を見つめ直して～ 《或る春の日から》

市民科学者 橋本正明

『あの日』から丸6年が過ぎた。私たちは『あの日』それぞれ『自分が体験した東日本大震災の記憶』を持っているはずであるが、その忌まわしくも何物にも替え難い記憶は、時の経過と共に薄れつつある。私はこの未曾有の大災害である東日本大震災についての自分の体験、自分の想いを発生から千日後を契機に書き溜めた備忘録の中から紐解いて、少しだけシェーラザードの真似事をしてみよう。まずは…

(その1：その刻)

『!?…、揺れてる!!』、
私は所属事務所の異動に伴う引っ越しの真っ最中であった。
妙に長い揺れ…
突然大きな横揺れに変わり、まともに立っていることが困難となった。
辛うじて近くにあったカウンターにしがみつき揺れが収まるのを待つ…

おかしい。。
収まるどころかどんどん強くなる！
いや、少し弱くなったと思うとまた揺れが大きくなる。その繰り返しだ。
ここは2Fの大きな事務フロアだが足元の感覚で床が大きく波を打っているのが判る。
ロッカーの扉がボタン、ボタンと大きな音を立てながら開閉する。棚に保管してあった書類が散乱し、周囲の同僚たちの悲鳴が時折上がる。
信じたくはないが『床が抜ける!』と感じた瞬間が2回ほどあった。
床が抜けたら一体どうなるだろう。誰か私を見つけてくれるだろうか…

怖い。。。
目の前で起こっている出来事が現実の出来事ではないような、まるで他人事のように感じる。
だが、足がすくむ…

やっと揺れが収まった。数十分もそうしていたような疲弊感。
『ついに関東大震災が来てしまったか…』
諦めの気持ちで携帯を開きウェザーニューズ社のサイトへとアクセス、そして私はざわめく周囲に叫んだ。
『関東地方震度5強、震源地…!?!』

息を呑んだ。
信じられない!

『震源地宮城! マグニチュード8!』

だがこれはまだ始まりでしかなかった。
私はまだ事の重大さ、これから失われゆく多くの命に想いを馳せることも、またその余裕すらなかった。

(その2：あの日の夜)

『ともかく移動しましょう』、
上司に促され、私たちは引っ越しの荷を載せたトラックに分乗して異動先へ向かった。ふと出発前に駅を見てみると電車は停まっていた。
しかしこの時は帰宅難民が出るほど動かなくなるとは夢想だにしていなかった。

異動先へは車で通常は20分程度、しかし既に道路は震災時に不通となる幹線から次第に枝道へと壊死し始めていた。
寒さが助手席に忍び込む。(一体いつになったら進むのだろう…?)

遅々として進まない車列、やっとの思いでようやく裏道から目的地へ到着する。
通常なら20分かからない道程に1時間以上はかかっただろうか。
混乱している異動先の事務所で手早く荷物を開き月曜日からの業務の体勢の準備を始める。
まだ現実感が無い。何か夢の中にいるようだ。もしそうなら早く覚めてくれればいい…
だが、そうはならないことは分かり切っている。
でも何か体を動かし続けないとオカシクナッテシマイソウダ。

やっと段取りが一通り完了し、気がつくともう6時を過ぎていた。
『帰宅できる人は随時帰ってください。まだ電車が動いていないようなので、困難な人は送ります。』
上長が事務所の人みんなに声をかけ、それぞれ乗る車を割り当てて送り出す。
私は何とか歩いて帰れそうだが…
すると上長が私に

『どうします。送りましょうか。』、
『いや、大丈夫です』、
『(歩いて1時間の距離は)結構ありますよ。』、
『じゃあ、済みません。お願いします。』

幸いなことに新しい勤務先から私のアパートへ向かうJRと平行して走る公園沿いの道は渋滞してはいなかった。しかし、JRは全く動いていないようだ。
いったいつ開くのか全く見当もつかない開かずの踏み切りが渋滞を形成し始めている…
…と、中央分離帯の切れ目に差し掛かる。
私たちの目前に踏み切り前に連なる渋滞の最後尾のテールランプが迫る。
どうする、降りるべきか?
私は自問した。

此処を逃すとこの先は中央分離帯が続き、一旦渋滞で停まるともうしばらくの間はずっと動けなくなるだろう(私は帰れても…)。
振り返ると幸い後続車はいない。
(今しかない!)

『ありがとうございます！此処で引き返して下さい！お気をつけて！！』
私は車から飛び出すと、エンジン音を立てながら真っ赤に瞬いている地上の星々へ向かって勢い良く駆け出した。

(その3：越えられそうもない夜)

『買い物に行くぞ!』
帰宅するなり、私は妻に呼びかけた。
脳裏に浮かんでいたのは、我先に人々が食料品や日用品を買い占める姿…
私自身は幼少で記憶には無いが。。
オイルショックの再来だ!
事態は恐らく一刻を争うことにもなるだろう。

妻とはメールで1時間後には無事が確認できていたが、正直なところ細かく状況は確認できていなかった。
本当は色々を確認したいことや落ち着かせ宥めたりもしたかった。
だが今は無理だ。
それでも妻は続く余震や次々と入るニュースに怯えて行きたくないと言う(無理もない。しかし…)、
『いいから行こう!行かなきゃ!』、

無理やり外出の支度をさせて近所のドラッグストアに行く。
道路は全く動いていない、だが幸いなことにドラッグストアは一見いつもと変わらない。
どうやら通常に営業しているようだ。
『日用品や食料品を買おう。保存の利くものもいい!』、
まだ店内は人がまばらで品物はいつもと変わらずにある。でもこれが数時間後にもあるかどうかは判らない。
必要最小限に留めるにしても全く備蓄しないわけにはいかないだろう。

『どのくらい買ったらいい?』妻が訊く。
『そうだな…。目安1週間かな?』
それ以上はさすがに判らないし、2人では1度に2日分くらいしか買えない。
『残りは明日だ。とにかく早く戻ろう。』

戻って色々な話、ニュースをチェックする。
(酷い…、酷すぎる。。一体これからどうなってしまうんだろう…)不安が過ぎる。
しかし、自分にはどうすることもできない。
親兄弟や友人からの安否を問うメールに無事ですと返答を繰り返す。
だが、福島の親友からは返事が無い。(無事であってくれ…)

そのうちTVが石巻付近の海上火災の様子を映し出した。
(まただ!)闇に浮かび上がる炎の記憶…。
私がまだ入社数年目の頃に阪神・淡路大震災の神戸からのTVの実況中継で見た光景。
炎の向こうに居るであろう、生きたまま業火の中で焼かれる人々の痛み、恐怖、無念の想い。
だが自分は成すすべなく見守るしかない。

体が震えている。。
あの悪夢が再び起こるとは。
本当はこれは夢ではないだろうか?夢なら早く醒めて欲しい…

そう思いながら見つめる画面の傍らでは大津波警報が画面にずっと映り続けている。
(ここは多摩川中流部の河岸段丘の上側の台地だ、決して津波は来ない、来るはずがない)
しかし…、恐ろしい。。。

(その4：醒めない悪夢)

それは静かで清々しい陽光が差し込んでいる朝だった。
暖かい陽だまり、澄み切った空、静寂の中でさえずる野鳥たちの声…
静かだった。。。

いや、判っていた。
この静けさは偽りの静けさであると。
一度TVを点ければ二度とは戻れなくなる静寂…

それは悪夢だった。
時間を追うごとに増えていく被害、誰一人声を上げる者のいない沈黙した被災地、
繰り返される津波の映像、
飲み込まれる田畑、
人々の悲鳴、
悲嘆にくれる被災者、
人気の無い水面の上空を飛ぶヘリからのレポート。。。

そして道路、
幾分はマシになったもののガス欠で放置された車両や一晩中動かなかった車もあったようだ。
都内では帰宅難民と化した人々が長蛇の列を成して一晩中かけて歩き通した者もいたようだし、
隣の住人は実際、明け方になってようやく帰宅した物音がした。
今日はまだ車での移動は危険だ。

『今日は車は無理だ。昨日のドラッグストアでもう一度買い物をしよう。』
既に店内は昨日が嘘のように客でごった返していた。
やっとの思いで購入して帰宅する。
あとは明日が勝負だ。。。
でもここで働いている人たちはいつ自分たちの買い物ができるのだろうか？

幸いなことに私の愛車は先週末に満タンにしてある。
この車（プリウス）なら市内の移動だけで使っても600～800kmは走行できるだろう。
慎重に週末の買い物だけで乗れば1ヶ月は何とかやり過ごせる。
心配なのは食料や日用品の流通の復旧だ。
首都圏が被災する想定があってもこの状況は全くの想定外だ。
被災地への流通が優先なのは当然としてエアポケットとなる首都圏はどれだけ持ち堪えられるだろうか？

それは未だかつて問われたことは無かった。
そしてその答えを知っている者は誰もいなかった。

その一方で間もなく全世界を震撼させることになる深刻な事態が刻一刻と進行していることを全く私は意識してはいなかった。

知らなかったのだ。
いや、私にとってまだ『それ』は他人事でしかなかったのだ。

(その5：モラリティ)

人は日常をつつが無く過ごすためにモラルを身にまとう。
しかし、非常時において時として人はモラルを脱ぎ捨て己の全てを曝す。
それは必ずしも美しさを伴わない。
殆どと言っていいくらい、見るに堪えぬものだ。

それは例えば、
イナゴのように食料や日用品に群がり我先にとそれらを買ひ漁る人々、
大きな米袋を抱え長蛇の列に素知らぬ顔で割り込む老婦人、
口伝に広まるデマ、
市原のガスタンクの爆発に関するチェーンメール、
間引きされ満員になった電車に肘で乗客を掻き分け、強引に体を押し込んでくるサラリーマン、
被災地を荒らす火事場泥棒たち、
計画停電の暗闇に潜む犯罪者たち、
そして自らの過ちを認めずに嘘に嘘を塗り固める人々…



だがその一方では、
整然とガソリンスタンド前に並んで給油の順番を待つ人々、
助け合いながら家路を急ぐ帰宅難民者たち、
誰に言われることも無く自発的に被災地へ向かうボランティアの人々、
夜回りする自警団、
破壊されたインフラを一刻も早く復旧させようと必死に働く電力会社やガス会社の作業員たち、
不眠不休で被災者の救助にあたる自衛隊員、
撤退命令が出ているにも関わらず踏みとどまって決死隊の編成を試みるイチエフの人々、
そして津波の迫る中、或いはそれに吞まれながらも、
自らの身を挺してわが子や肉親、友人、見知らぬ人を救おうと、
或る者は生還を果たし、また或る者は…

もし明日の我が身がそうだとしたら、
もし自分の大切な人がそんな目に遭ったとしたら、

私ならどうしたろうか…？
あなたならどうするだろうか…？

(その6 : Confession)

必要悪だと思っていた。
震災前までは…

何故なら震災の前年に政権が世界に公言した『90年比CO2 マイナス25%』という野心的な国際公約を達成するには原発の比率を50%近くまで上げなくてはいけないという触れ込みであったからだ。核物質は放射線を出す化学物質であり、毒性も同じように持っている。ただ、扱う法律が特別であるがために通常の毒性物質を扱う法律では扱えないだけである。

何かが気に入らなかった。
しかし特別な法律にまで踏み込んで調べるところまでは行かなかった。
どこかできっと煩わしさを避けていたのだと思う。
しかし、『あの日』から…

『まさか…、外を歩いて帰ってきたの!? どうしてっ!?』

妻が半狂乱になって私に訊く。

(何だろう? 何でこんなに取り乱しているんだろう?)

私はただ計画停電で業務不能と判断があったから勤務先から帰宅するのに、モノレールに乗らずにJRの駅まで数キロをゆっくり歩いただけなのに。

『原発が…、原発が爆発したのよっ!』

何を言っているのか判らなかった。

え…っ?

有り得ないだろう?

何をバカなことを…

こんな時に何の冗談なんだろう???

『ニュースで…、ニュースでも言ってるの、どうして? どうして歩いてきたのっ!??』、私の頭の中がぐるぐると回っている。

いや、仮に…

仮に爆発したとしてもここは東京の西の外れだ。

福島からは数百キロも離れている。。

『有り得ない』だろう。。。

未だに頭では判っていても心の中では理解できていない。

この時から私の中で『何か』が完全に壊れてしまった。

震災前にはあったはずの『何か』が…

それは『安全』であろうか、『安心』であろうか。

それとも『信頼』?

それとも『神話』?

それとも『国…

(その7：自分にしかできないこと)

『自分にしか出来ない事』ってイメージできるだろうか。大抵の人は多分できないだろう。私もそうだった。

『あの日』から必死にもがいて見つけるまでは…

私は（真面目な話として）東北弁がテロップ抜きで大体わかる（と思う）。子供の頃によく東北出身の近所の爺さん、婆さんに構って貰ったからだ。でも、『あの日』から繰り返しTVから聞こえて来るのは悲痛な叫び、嘆き、ため息、そして言葉にすらならない声…

行って何人かの人を救うことはできるかも知れない。でも私は困っている人みんなを助けたかった。そんな事は無理だ。判りきっている。それでも私は何かしたかった。いや、何かしないとアタマガオカシクナッテシマイソウだった。

私は自分のありったけの『経験と知識と想い』を振り絞って三日三晩考え続けた。私にとっての『その刻』は唐突にやって来た。それはTVの中継で火の気の無い避難所で寒さに震えている人たちを報道している時だった。

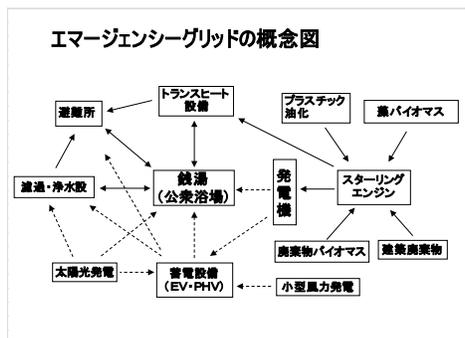
『何だ…、その辺にあるものをドラム缶に入れて焚き火をすればいいし、お湯を沸かして湯たんぽにすれば…！？』 そうか！

あった！自分にしか出来ないこと。みんなが知らないこと、忘れていること、気付くこと、教えること。伝えること。それは此処にいても出来るし、やり方次第では新しい社会への一歩になるかも知れない。

そう思った私は新年早々1本（不定愁訴発症機序仮説）着手して入稿した直後に手を付けたばかりの論文（環境保全資金調達手法）を急ぎ完成させ、参考書類を購入し、濫読し、震災に強いエネルギーシステムの構築に関する提言論文の作成に取りかかり、寝食を忘れ、その作業に狂ったように没頭した。

私にはそうすることが唯一正気を保つための方法のように思えた。いや、わずか4ヶ月で全く分野の異なる3本の提言論文を書こうなんて無理で無謀なのは判りきっていた。そんなことを試みるなんて、私は実際には狂っていたのかも知れない。

しかし当時の私にはそうすることしか出来なかったのだ。それしか正気を保つ術を見つめることが出来なかったのだ。



(その8：怒り・友からのメール)

大震災による過酷事故の真っ只中の5月に『微量の放射線は無害。むしろ体にいい』と言い放った政治家がいた。

同じ頃、私は一人の友人からのメールを受け取った。

彼とは国家資格試験を通じて知り合った。

温和な表情で語り口の柔らかい彼はその人柄で周囲からの人望も厚く、若手の技術者たちの委員会の中核の職を務める程であった。

私は震災後に急遽書き上げた論文について彼から批評を貰おうと思いメールを送った。

メールはしばらくしてから返ってきたが、その内容は筆舌に尽くし難いものであった。

そこで彼が語っていたのは、彼の出身が福島県であること、さらには海岸付近の集落であったこと、親や兄弟、親類、地元の友人たちの殆どと連絡が取れないこと、原発の事故の後は検索に入ることができなかったこと、ようやくG. W明けに1回目の検索に入れたこと、そして…

私は涙を流すことしか出来なかった。

いや、私は彼に対してどのような言葉を紡げばよいのか全く判らなかつた。

確かにTVや新聞の報道などでフクシマの海岸の集落の惨状について見聞きはした。

『あれ』さえなければ瓦礫の下から救い出せたかも知れなかつた命、

寒さに震えながら凍え死なずに済んだかも知れなかつた命、

動けないまま餓死せずに済んだかも知れなかつた命…

その一方でムラの科学者や政治家たちは言った。

『安全だ』、

『起こるはずがなかつた』、

『むしろ体にいい』、

『今回の原発事故での死亡者はいない』と…

嘘だ！！

嘘っぱちだ！！

自分のこととして考えてみろっ！！

絶対！絶対に許せない！

いや、許さない！！

私は彼に短い返信を送ることしかできなかつた。そして思った。

私はもう彼と笑って顔を合わせることができない。

自分は『あれ』の恩恵を受けつつ、安穏とした生活を送っていた自分を許せなかつた。

もし彼を苦しめた『あれ』を廃絶できたとしたら、私は以前のように笑って彼と酒を酌み交わすことができるだろうか…

いや、そうしたい。そうしなければいけない。例えそれがいつになるか判らなくても。

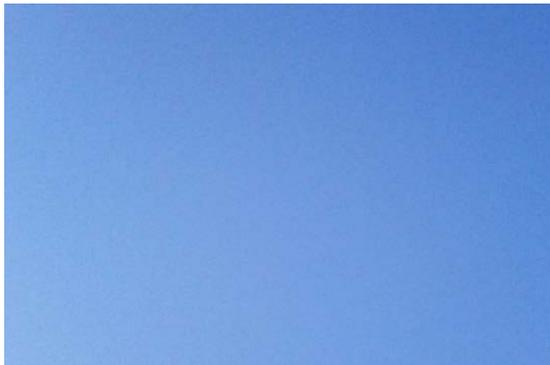
いつか…、きっと。

(その9：計画停電より優先されるスポット)

『もうすぐ電気落ちま〜す』。
事務所内に作業の切り換えを促す声が響く。
やれやれ…

私が当時使っていたノートPCはバッテリーがダメになっていて停電と同時に落ちてしまう。
『バシャン!』
データ保存していない作業途中のデータは全てパー。それにサーバーが繋がらなければオンラインの仕事は全くできないし、メールも使えない。勿論、FAXも動かない。
これじゃぁ仕事にならない…

4月のキレイに雲一つなく晴れ上がった晴天の昼なのに事務所の内部は停電で薄暗い。
暖房の切れた事務所の中は寒いし気が滅入るので外の空気を吸いに出る。
大震災の事など嘘のように思えるほど澄み切って抜けるような青空。。。



でもここ数日私は腑に落ちていなかった。
何故ならこの計画停電のご時世において、私が住んでいるアパートの周辺だけが停電しないのだ。
確かに市のHPの地図には各エリア満遍なく色分けされている。
本来なら輪番で確実に停電の順番が廻ってくるはず、
しかし何処にも見当たらないのだ。区分け住所の一覧にこの周辺だけが…
そして隣近所には停電の時間がきた。

『あ…、落ちた』、
『うん、でもうちは点いてるね』、
『みんな頑張ってるんだ。うちも消そう』、
『…そうだね。でもなんでこの辺だけ停電しないの?』

ちなみに私の居住するエリアは米空軍横田基地にほど近い。
もしや? 何か…
でも本当にこの近くにあるのだろうか。そんな施設は『無い』はずだ!

このような『スポット』はもしかしたら至る所に在るのかも知れない。
信じるか信じないかは…

(その10：続く余震と地震警報)

！？

突如響き渡るアラームに全身が硬直し身構える。

…来た！

まただ…。

また揺れている。

『あの日』から一体どれだけ揺れているのだろうか。

『あの日』以降、東京に住んでいる私にも感じる地震だけでも何回あったことか。

活性化した震源域から遠いここ関東ですら体を感じるのだ。

激甚な災害に遭遇した東北の人達はどんな思いでいることだろう。

それだけではない、

その日の夜に長野県の栄村が大きく揺れたように、東日本を中心として日本各地の断層がより活発に動き始めたのだ。

実際、関東地方でも茨城や千葉県北東部を震源とする地震動が増えた。

富士山近くを震源とする地震が発生してしばらくは富士山の噴火が連動して発生するのではないかと報道が続き、首都圏がパニックになりかけたように感じたこともあった。

あの熊本での大地震とその直後からの絶え間ない余震もあながち無関係と誰が断言できるだろう。

そして遠隔地での地震動を知らせるあの心に重苦しく響き渡る携帯やTVでのアラーム音、

その直後に襲い掛かる弱い揺れ、激しい揺れ。

これが大震災後にトラウマになった人も多かったようだ。

でもきっと近々に日本のあちらこちらで次の大震災は起きるだろう…

そのとき…

どうする？

どうしたらいいのだろうか。

未曾有の大震災から6年を経た今でもその答えは無い。

いや、人々が『あの日』の記憶を失ってしまえば、その答えは何時までも見つからないだろう。

見つかるはずが無いのである。

私たちが『あの日』のことを『自分のこと』として真正面から向き合わない限り。

このまま『あの日』の記憶は忘れ去られてしまうのであろうか。

でも、このままいっそ忘れてしまえば、どんなに楽なんだろう…

何も考えずに、何も心配せずに過ごしていたあの日々、

もう二度と戻らない日々。

このまま手をこまねいて再び同じ過ちを繰り返すのであろうか。私たちは、私は…

忘れてはいけない。

忘れてはいけない。

忘れては…

(その11：明日へ勇気と優しさを：アンパンマンとポポポ、ポ〜ン)

震災直後のTVや新聞などのメディアはCMや広告を一切打たなかった。またスポンサーもいなかった。映し出されるのは被災地の深刻な被害の状況や繰り返し流される津波の映像、そして刻一刻と深刻さを増してゆく原発事故関連の報道ばかり…

絶望感に包まれ次第に萎えていこうとする心、抗うにもどうしようもない閉塞感。きっと誰しもがそう思っていたに違いない。

だが違った。
絶望の淵に陥った人々の心を救ったもの。
それは『アンパンマンのマーチ』

何故だろう。大震災の前は全く興味すら無かったのに、今は感じる。
詩に込められた想いを、願いを。
そして前に進む勇気、その無私の心に宿るチカラを。

そしてもう一つ。
『あいさつの魔法』。

【ACJapan（日本広告機構）】
<http://www.ad-c.or.jp/campaign/search/index.php?id=558>

あいさつ坊や、あいさつガール、こんにちワン、ありがとウサギ、こんばんワニ、さよなライオン、おはようナギ、いただきマウス、いってきますカンク、ただいまンボウ、ごちそうさマウス、おやすみなサイ。

彼らは『人と人が繋がるチカラ』を私たちの心に刻んでくれた。
たとえ繰り返し、繰り返し放送されたが故に、私たちの大震災の辛い記憶と深く深く結びついてしまい、もう二度とオンエアされないであろうとしても…

今、私たちは忘れてはいないだろうか。
『あの刻』の想いを、そして願いを。

確かに『あの刻の記憶』は辛いことを呼び覚まし、私たちを再び傷つけるだろう。
できればそっとしておきたい。
でもそれでは私たちは前には進めない。
それでは安らかに眠れない。生ける者も、逝ってしまった人々もまた…

そうでしょうか？
それじゃあ、みんなここまでありがとう。

そしておやすみなサイ。